

## 団塊世代・元気高齢者地域活性化推進協議会（第4回）議論要旨

## ＜議題＞

- 1 地域活動・社会活動とのマッチングについて
- 2 地域活動・社会参加促進に向けての気運醸成

## ＜主な意見＞

## （気運醸成・世田谷区の事業における意見）

- イベントは実行委員会では難しいところ（場所や機材、広報等）を行政が手助けしながら、しかし内容には制約をかけず、実行委員会が主体となって運営していく、フリーなところで運営するということは大事ななと思う。先に制約があると面白いアイデアが出てこない。
- イベントの大きい目標である、来場者を地域活動へと繋げるということは達成されていない。イベント会場には人はやってきたが、その来場者を地域活動へ引き込む、新規活動者を獲得することはできていない。広報・PRがピンボケだったか。ヴィンテージライフって何の意味かわからない、趣旨をはっきりと打ち出していくことが必要だったか。広報は関心がないひとにも興味をもってもらうやり方が必要。広報の仕方は難しい。
- 気運づくりは、ある程度年数を重ねていくことが必要。1回だけでは行き渡らない。そして本当に来て欲しいひとにPRする仕掛けが必要。
- イベントを横目でみて、その次に地域活動に興味をもったひとが相談できる場所、窓口が必要。
- 関心があってイベントに立ち寄って、ブースを見ながら、でも人間は引っ込み事案なところがあるからなかなか入れない。そんなときにつないでくれる人、コーディネーター役が必要。来場者とブースをつなぐ役割の人。
- 住民の地域活動の大部分は地域福祉の活動。ひとり暮らし高齢者の見守りや災害時要援護者の問題。そこで保健福祉の分野で実施している。しかし、生涯学習や市民活動との連携も必要。縦割りではなく、横断的に連携して進めていく必要がある。
- 生涯現役ポイントがつく主なものとして、「安全・安心のまちづくり」、「環境活動」など。交通系ICカードを活用しているためランニングコストが

かかる。またポイントの原資も課題。社会実験であるから今後評価・検証していく。

- 地域レベルでは町会・老人クラブとの連携必要。70代、80代となってくると生活圏が地域になってくる。NPOの方も自治会・町内会、老人クラブと協働していくアプローチが必要。地方では地縁組織のほうでやっているが、東京では協働が薄い。一緒に地域を豊かに耕していくことがポイント。
- 地縁組織とNPOとの連携ができていないところも多い。お互い歩みよることが必要なのでは。
- 多様な地域活動の組織があることは東京の強みでもある。町会といった歴史のある組織と新しい組織との折衷。
- NPOを機能集団、ひとつのテーマに特化しているが、それをNPOだけのものにしておくのはもったいない。  
伝統的な地縁集団は、地域全体を網羅している、歴史をよく知っているなど歴史性・包括性はNPOにはまねできない。そのお互いのよさを生かし合うことが必要。引き出し方。お互いを認め合う気運づくり。その成功事例を積極的に紹介していくことも大事。

#### (マッチングでの意見)

- 三鷹いきいきプラスに登録される活動依頼はすべて無償、ボランティアではない。幾らかの有償もあり。アンケート謝礼など。
- 依頼された案件を、たとえば地域の老人クラブにつなぐなどがあれば、地域づくりみたいにつながっていく。そういうコーディネーションが必要と思う。
- ウェブを使っての一番のメリットは速いこと、コストがかからないこと。少ない運営費のなかで効率をあげていくとなると、ウェブでのマッチングが必要となってくる。
- ウェブサイトで依頼された案件を、ボランティアセンターや老人クラブなどへつなぐ仕掛けが必要。ボラセンやシルバー人材センターがマッチングをウェブ上でやればつなぐことができるのでは。

- 地縁組織やNPOなどが、連携してマッチングや地域活動を盛り上げていくことをコーディネーションすることあたりが東京都の役割だと思う。人をどう介在するか、きちんと配置するか。
- マッチングをコミュニティビジネスにできないか模索したことがあるが、なかなか難しい。あっせん料をとったら就職あっせんになってしまう。
- イギリス、アメリカでNPOが発展したとき、IT技術が大きく貢献している。効率性が大きなポイント。コーディネートは非常に手間ひまがかかる。特に団塊世代や元気な高齢者の方々は丁寧にやらないと。
- 八王子にもコーディネート機能をもつ部門はあるが、実際のところ活動がうまく進むようなコーディネート機能は果たしていない。ボランティアだけでは活発にならないのでは。  
団塊世代が何かをやろうというときの入口、マッチングは簡単じゃないというのが実感。中間団体がすばらしい企画を出しても実践にはなかなか結びつかない。自治会や町会が動かないといい地域活動にはつながりにくいという思いがある。
- 東京の特に男性シニア、企業人に対してコーディネートしていくコツ、プロセスの議論を市町村に提案して、実施していただくことが大事。ITを使うことは大きな可能性を秘めている。
- コーディネーターは非常に難しい。個人差があり調整役が難しい。地域をよくわかっていないと難しい。各地域でそういう人を養成する部門を担わなくてはいけない。ケアマネがいろんなサービスをつなぎ合わせるのと同じように、コーディネーターというのはいろんな面でつなぎ合わせていく、とても重要なポストという位置づけである。マッチングさせるときに相手のニーズとセキュリティをうまく合わせることを大事に、だれでもいいということじゃない。この辺を踏まえてコーディネーションするということが大事。
- コーディネーションには専門性がある。社協のコーディネーターは専門性があって、適切なかじとりをしている。ボラセンやシルバーなど、うまく系統立ててつながっていくことが大事で今後必要では。
- ウェブの利点はだれにでも繋げる。ネットワークはオープン。インターネットはマッチングするためには有効な技術だし、そういうための技術でもあり難しいことではない。決してお金のかかる仕組みではない。インタ

ーネットオークションは売り手と買い手とのマッチングで、セキュリティの関係で社会問題化するほど頻発しているわけではない。必要なのは免責事項など、手続きやルールをしっかりとつくること。人にコストがかかるのであればなるべく自動化する仕組みを考え、インターネットはそういうところで使われいろんなビジネスモデルがある。

専門性の高いものをマッチするとなるとコーディネーションは必要だけれど、在宅でパソコンを教えてもらいたいという程度であれば難しいことではない。

- コーディネーションを専門的にやると逆に広がらない気がする。地域ベースでやっていると情報量が多いと逆にできなくなってしまうということもある。すごい訓練を受けないとできないとなると、躊躇して参加しないということになりかねない。地域で気楽にやるみたいなのをしないとなかなか進まない。
- 実際に地域の相談を受けている。ちょっとした、まさに地域に密着した困りごとの相談。相談員は資格があるわけではない。気楽な感じで一緒に悩んで考えるといった感じ。お金はとらない。
- コーディネーターととらえると難しい。要は「おっせかいやき」を作ることが必要。イベントの会場で「どう、はいりませんか？」とあと押しをするような人。おせっかいやきを作り、そのおせっかいやきの力が集うコミュニティサロンとか、町のたまり場が絶対必要。そういう場でみんなの力を出し合って、わからないことあればこちらに聞くといった、お互いそれぞれの力を出し合う、コーディネーターとは意外におせっかい、何とかしなきゃという人を発掘するということ。
- 話しをよく聞いてあげることが大事。問題を解決するためにはどうすればいいか、知恵を寄せ集め、地域包括やボラセン、区、などいろんな知恵を寄せ集めてサポートしていく。コーディネーターとはいろんな人たちが何人は集まって連携して動いていく感じだと思う。
- 高齢者シニアの方たちが何を望んでいるのかを整理をしながら、地域活動や社会貢献活動へ結びつけていくことを検討進めていく。